

「一切衆生と一闍提」 レジюме

発表者：幅田裕美

「一切衆生悉有仏性」を説く〈大般涅槃經〉において「一切衆生」は具体的にどのような意味で用いられているのであろうか。また「一切衆生」と「一闍提」はどのような関係にあるのか。従来の研究では曇無讖訳『大般涅槃經』、法顕訳『大般泥洹經』の両漢訳とチベット語訳を比較対照した研究が蓄積されてきたが、本発表ではさらに梵文断片の研究も踏まえて、この問題を再検討したい。

漢訳の「衆生」は様々な梵語の翻訳に用いられるが、〈大般涅槃經〉ではチベット語訳の *sems can* および梵文断片の *sattva* に対応している。「一切衆生」が具体的に現れるのは、經の冒頭で仏陀の般涅槃が宣告され、あらゆる衆生が仏陀のもとに集まる場面である。声聞、比丘、比丘尼、菩薩、優婆塞、優婆夷などに始まり、夜叉や神々、象や獅子などの動物から蜘蛛などまでが集まり、そこには悪人も罪人も含まれている。

次に肉食の禁止に関する段落において、「いのち有るもの」としての「衆生」がどのような範囲を意味しているのかをうかがい知ることができよう。肉食の対象となる動物は、肉を食べた人の肉臭を嗅いで驚き慄く。このように「いのち有るもの」を脅かすような肉食は避けるべきであると説かれる。

「如来」と「衆生」の関係においても、〈大般涅槃經〉における *sattva* の意味を検討する必要があるであろう。そこでは、救う者である「如来」と救われる者である「衆生」というような構造が必ずしも有効ではないようである。仏陀の遺骨についての段落において、如来もまた *sattva* であると表現されるが、ここでは、*sattva* が「(輪廻の世界に)存在する者」という意味で用いられていると解釈できよう。

「一闍提」と「衆生」の関係については、*icchantika* を扱う梵文断片において、翻訳資料のみでは難解なテキストの解釈が可能となる。さとの因 *bodhihetu* をもたない「一闍提」も「一切衆生」に含まれ、その一切衆生が如来の力によって未来にさとりを得る時に、一闍提もまたさとりを得ると説かれる。さらに「一闍提」と「菩薩」の関係についても示唆する表現がみられる。

キーワード：一切衆生、一闍提、大般涅槃經